

# 漱石『虞美人草』（十八）における メレディスの引用について 小鹿原 敏夫

## （0）漱石とメレディスについて

ジョージ・メレディス（George Meredith 1828~1909）は漱石が敬愛してやまなかった英国の詩人、小説家である。漱石のロンドン留学中（1900.10~1902.12）、メレディスはまだ存命中でロンドンの郊外に在住していたが、二人が直接出会う機会はなかった。

『吾輩は猫である』（十一）（1905）のなかで迷亭が個性の強い作家は現今の読者に敬遠されていると次のように主張している。

○メレヂスを見給え、ジェームスを見給え。読み手は極めて少ないじゃないか。少ない訳さ。あんな作品はあんな個性のある人でなければ読んで面白くないんだから仕方がない。

没後百年、「ジェームス」すなわちヘンリー・ジェイムズ（Henry James 1843~1916）の英米での人気は高く、映画化された作品も多い<sup>(1)</sup>。しかし一方メレディスは母国においてまったく人気の無い作家である。書店の書架では代表作とみなされている小説『エゴイスト』（The Egoist 1879）以外の作品をみかけることはまずない。しかし『猫』の迷亭が1905年のメレディスに読者が少なかったと述べているのには誇張があった。当時メレディスは大衆作家でこそなかったが、ヴィクトリア朝の偉大な作家のひとりとして世に知られていた。その証拠にメレディスの死去の際にはウェストミンスター寺院の文人顕彰コーナーに埋葬する国葬が提案されている（しかしメレディスが無宗教であったことで国教会の反対があり実現しなかった）。

そんなメレディスにも1851年に処女詩集を出版してから三十年以上、詩人としても小説家としても自立できなかった長い苦節の時代があった。この間、恒産のなかったメレディスは匿名で新聞のコラムを書いたり、出版社への応募原稿の下読みといった副業で生活を支えた。ようやく世間の評価が変わるきっかけとなった作品がメレディスが五十七歳のときに発表した『十字路邸のダイアナ』（Diana of the Crossways 1885）であった。これによって文壇で尊敬される作家の一人という不動の地位を確立した。メレディスの作品が英米で再びあまり読まれなくなったのは第一次世界大戦が終わってからの1920年代以降である。

メレディスの評判が特に晩年に高まったのは、彼が生前若い世代の作家とよく交流し面倒見が良かったことが理由にあげられる。ロバート・ルイス・ステューブソン

(Robert Louis Stevenson 1850~1894)、トマス・ハーディー (Thomas Hardy 1840~1928) のような多くの若い世代の作家がメレディスを自宅に訪ね彼を称揚した言葉を残している。漱石は常々ステープンソンの簡潔な文章を好むとしていた<sup>(2)</sup>。したがってそのステープンソンが正反対の晦渋な文体を持つメレディスを尊敬しているという発言は漱石にも大きな印象を残したと思われる。

また漱石は留学中、個人指導を受けていたクレイグ先生に「George Meredith の事に就て聞たら少しも知らない色々言訳をした」(日記 1901.2.20)と得意げに記している。これはクレイグ先生の方に当時の文壇の大御所であるメレディスをよく知らないことに対して言い訳をする必要があったわけである。またメレディスの訃報に際して漱石は「(メレディスの小説は)大抵皆読んだ。而して大変エライと思っている」という談話を残している。「国民新聞」全集二五巻.p.352 1909.5.21/22)。このことは漱石の蔵書にあるメレディスの著作に多くの書き込みが残されていることでもうかがわれる。

さらに漱石のメレディスへの関心はメレディスの没後も全く衰えていなかったようである。それは大正2年の年初に発表された『行人』(「兄」二十)の一郎と二郎の会話の場面でのメレディス引用に現れている。

○「その人(メレディス)の書翰の一つのうちに彼は斯んな事を云つてゐる。—自分は女の容貌に満足する人を見ると羨ましい。女の肉に満足する人を見ても羨ましい。自分は何うあつても女の霊といふか魂といふか、所謂スピリットを攫まなければ満足が出来ない。それだから何しても自分には恋愛事件が起らない。」

「メレヂスつて男は生涯独身で暮らしたんですかね」

「そんな事は知らない。又そんな事は何うでも構わないぢやないか。然し二郎、おれが霊も魂も所謂スピリットも攫まない女と結婚してゐる事だけは慥だ」

ここで一郎が語っているメレディスの書翰は1912年10月にロンドンで出版されたメレディス書翰集(Meredith 1912:115)で初めて公開されたものである。これをおそらく日本でいち早く読んだ漱石はメレディスが親友に宛てた1861年10月19日付けの手紙の一節を訳して連載中の『行人』に引用したとみられる<sup>(3)</sup>。

#### (1) 『虞美人草』におけるメレディス引用

漱石の初期の三作品『草枕』(1906)、『虞美人草』(1907)、『三四郎』(1908)は「新しい女」三部作と呼ばれることがある。これらの作品には才色兼備でしかも近代的な自我の意識を持ち、時代が要求した倫理観よりも自己を充足させる行動をとることもある「新しい女」(那美、甲野藤尾、美禰子)が描かれているためである。

そのひとつ『虞美人草』に藤尾と逢瀬を約束した小野清三が待ち合わせ場所に出発しようかしまいかと逡巡する場面がある。この逢瀬(新橋駅で午後三時に待ち合わせて大森に向かう)は小野と藤尾にとってそれぞれの周囲から押しつけられた婚約関係(小野×小夜子、藤尾×宗近)を断ち切り、二人の恋愛関係を世間に公言するのに等しかった。

この小説のクライマックスといえるだろう。その場面でメレディスを引用した以下の一節がある。

○メレディスの小説にこんな話がある。一ある男とある女が謀し合せて、停車場で落ち合ふ手筈をする。手筈が順に行つて、汽車がひゆうと鳴れば二人の名誉はそれぎりになる。二人の運命がいざと云ふ間際迄逼つた時女は遂に停車場へ来なかつた。男は待ち毫の顔を箱馬車の中に入れて、空しく家へ帰つて来た。あとで聞くと朋友の誰彼が、女を抑留して、わざと約束の期を誤まらしたのだと云ふ。(『虞美人草』十八)

この漱石のメレディス引用の典拠に関しては従来二つの説があることで知られる。

①小説『エゴイスト』(The Egoist 1879) 第27章で婚約者ウィロビーから逃れるためにクララは鉄道の駅に向かうが、第28章では出奔を諦め、駅からウィロビーの屋敷(パターン邸)に帰還したこと。

②小説『十字路邸のダイアナ』(Diana of the Crossways 1885 以下『ダイアナ』と略す)の第25章においてダイアナが愛人デイシアとの大陸への出奔のために鉄道の駅で待ち合わせを約束するが、ダイアナは現れず、デイシアは待ちぼうけを食らったこと。そしてその事情は第26章で明らかにされる。

全集の注(漱石 1994:508)では『エゴイスト』典拠説を採っている。しかし久野(1950:51)が『ダイアナ』を典拠にしている可能性をいち早く指摘し、海老池(1968:192-193)もこれに追随した。さらに最近では飛ヶ谷(2002:127-128)も『ダイアナ』説に支持を表明するなどして現在ではこちらの方が優位になっているようだ。本稿は後段でそれぞれの小説の当該部分がどちらを典拠にしているのかを詳しく検討する。しかしその前に小説『エゴイスト』、『ダイアナ』そして『虞美人草』に共通する「新しい女」の主題を探ることが必要と思われる。

## (2) 小説『エゴイスト』について

メレディスの小説『エゴイスト』を語る上で無視できないのは、これが当時の英国人なら誰でも知っていた「陶磁器の柳模様」の物語に基づいていたということである。これには Mayo (1942) の先駆的研究がある。十八世紀末から十九世紀前半にヨーロッパではシノワズリー(中国趣味)が大いに流行した。その一環として英国では清朝陶磁を真似た「柳模様」(the willow pattern)を染め付けした陶磁器が生産され広く流通した。これらは「塀に囲まれた大きな屋敷、柳の木、川にかかった橋、そしてその上を飛ぶ二羽の鳥」が青色染料で彩色されている。このような「陶磁器の柳模様」は次のような物語を踏まえていた。

○あるところに大きな屋敷に住む大人と美しい娘がいた。大人は娘を同じように裕福な家庭の息子と結婚させることにした。しかし娘は一文無しの使用人である青年と恋に落ちる。大人は二人の結婚を認めない。二人は屋敷を抜け出し駆け落ちしようとする。追手が迫り、二人は橋のところで捕まりそうになる。しかしそのとき二人の恋人は二羽の鳥に変身し飛び去っていった。



【柳模様の皿】

メレディスは小説『エゴイスト』のエゴイスト（「我意の人」）をサー・ウィロビー・パターン（Sir Willoughby Patterne）と名づけた。この命名は「柳模様」すなわちザ・ウィロー・パターン（the willow pattern）のパロディーであることは間違いない。その証拠に『エゴイスト』の第5章でパターン邸に滞在しているマウントスチュワート夫人はクララに「磁器製の愛嬌のあるいたずら者」（a dainty rogue of porcelain）というあだ名をつけている。またウィロビーとクララの破局が明らかになった終盤の第34章においては、二人の結婚祝いとして陶磁器の壺を送ろうとしたブッシュ夫人が（陶磁器を）「柳模様」（the willow pattern）にしておけば良かったと嘆いている。

『エゴイスト』でブッシュ夫人が引出物として贈った陶磁器はパターン邸へ輸送中にひび割れてしまう。これは明らかにウィロビーとクララの婚約の破談を暗示している。この陶磁器は『虞美人草』において藤尾が義父から相続した金時計に置き換わっているのではないか。『エゴイスト』の陶磁器は馬車が転覆した事故でひび割れるのであるが、藤尾の金時計は事故ではなく宗近の手で衆人の目の前で叩き壊され、そのショックによって藤尾は突然死するのである。

さて『エゴイスト』ではウィロビーの父親は登場しないのでウィロビーが「柳模様」の大人と婚約者の役割を兼ねている。そして彼はクララを束縛しパターン邸にふさわしい従順な奥方にするだけをお願いしている。クララがパターン家（Patterne）の妻（wife）になることを拒否することにも言葉遊びが読み取れる。つまり英語で a pattern wife といえは「模範的な細君」のことである。『エゴイスト』は「柳模様」の物語に倣

い、クララがウィロビーの束縛を逃れ、誰とどのようにして屋敷を去るのかということが興味である。その候補者は学者肌で感情表現が苦手なヴァーノンと「白い歯」をいつも見せている軽佻浮薄なド・クレイである<sup>(4)</sup>。作中クララに最もふさわしい男性は、素直に愛情表現ができるクロスジェイであるが、まだ十二歳の少年なのでクララの結婚相手からは除外される。そして結局クララは山好きで文人肌のヴァーノンを選ぶのである。メレディスは書翰<sup>(5)</sup>のなかでヴァーノンのモデルは親友の文筆家レズリー・ステファン (Leslie Stephen 1832～1904) であると明かしている。ちなみにステファンの娘の一人が二十世紀を代表する女流小説家ヴァージニア・ウルフ (Virginia Woolf 1882～1941) である。

### (3) 小説『ダイアナ』について

この小説の主人公ダイアナ・メリオンは十九世紀の女権拡張運動に大きな役割を果たした実在の女性キャロライン・ノートン (Caroline Norton née Sheridan 1808～1877) をモデルにしている。上流階級出身のキャロラインは下院議員であったノートン氏と結婚し三人の子供をもうけた。しかしノートン氏が妻と子供に暴力を振るうようになったことで夫婦は別居するに至った。しかし当時の法律では妻の立場は非常に弱く、夫の同意がないと離婚も子供の養育権も得ることができなかった。彼女はこのような自分の不幸な境遇を足がかりとして女性全体の権利拡大を社会に働きかけたフェミニストの嚆矢として知られる。

『ダイアナ』が出版されたときノートン女史は既に他界していた。しかし彼女が総理大臣と浮き名を流したり、愛人の国会議員から聞いた穀物条例の廃止 (1846) を新聞に漏洩したという噂は人々の記憶に残っており、上流階級のスキャンダラスな人物としてよく知られていた。そのおかげでメレディスの作品として初めて『ダイアナ』は一般読者の爆発的な支持を得ることができた。そして『ダイアナ』はメレディスに進歩的なフェミニスト作家という評判を与えた。また英国のみならずアメリカでの有利な出版契約を得たことで、メレディスはこれ以降副業をしなくとも筆一本で生活できるようになった。

しかし小説『ダイアナ』はその中のキャロライン・ノートンにまつわる逸話をはぎ取れば『エゴイスト』の焼き直しであるのは明白である。どちらも理解のない伴侶に縛られていた自立心の強い女性が、苦難の末その束縛から抜けだし、よりふさわしい伴侶と新しい人生へ羽ばたいていくというのがその骨子である。『ダイアナ』のウォーリック氏とダイアナは既婚で、『エゴイスト』のウィロビーとクララは婚約関係という相違はある。しかし当時、『エゴイスト』にみられるような教会で交わされた正式な婚約は厳格な契約とみなされていたことを考慮するとこの二人の女性の境遇は同じである。

ところが小説『ダイアナ』のダイアナとそのモデルには無視できない相違がある。ダイアナのモデルとなったキャロライン・ノートンは別居した夫婦に生ずる子供の親権の問題に大きくかかわっていた。彼女は別居した妻の財産権と子供の養育権を少しでも勝ち得ようとし、女性史に残る成果を挙げた。しかしメレディスの小説『ダイアナ』では

ダイアナとウォーリック氏の子供はなく、またダイアナは特に女性の財産権などの権利を拡張することには関心を示さない。彼女はただ自分の文筆家としてのキャリアの追求と親友エマ・ダンストンとの友情にだけ興味があるように描かれている。メレディスは書翰で自分は『ダイアナ』のなかでキャロライン・ノートンに知性を与えたとしているが<sup>6)</sup>、実はその代償としてフェミニストとしてのノートン女史の歴史的貢献を小説から消去している。またダイアナがしばしば深く考えないで衝動的な行動をとることを読者に批判されるとメレディスはケルト人特有の直情的な性格を反映させた結果であると弁解している<sup>7)</sup>。

『エゴイスト』ではウィロビーがパターン邸では圧倒的な力を持つエゴイストであり、クララが弱者という立場であることは明らかである。しかし『ダイアナ』の場合、夫ウォーリック氏の存在感があまりにも薄いので、彼がエゴイストというよりはむしろ奔放で時に人を裏切ったりするダイアナがエゴイストにみえる。実際これが漱石の読みではなかったかと思える。そしてダイアナの才色兼備ではあるものの、ときに徳義心の欠けた行動を取る性格は『虞美人草』の藤尾に反映されているのではないだろうか。

#### (4) メレディスと「新しい女」について

漱石は実人生において「新しい女」三部作で描いた那美、藤尾、美禰子といったタイプの女性を伴侶として持つことはなかった。しかしメレディスの場合は彼の最初の結婚はまさにそのような「新しい女」との葛藤であった。そしてこの「新しい女」との結婚の失敗が詩集『近代の恋』(Modern Love 1862)をはじめとしてその後のメレディスの文学のすべてに大きく影響を与えていることは周知の事実である。しかし小説家としてのメレディスには男と「新しい女」との葛藤を徹底的に描くことを避ける傾向があった。それどころか両者の安易な妥協点を見出す物語で人気を博したともいえる<sup>8)</sup>。それはメレディスが自分の最初の結婚の生々しい失敗体験に対峙できなかったことに原因があったようだ。

メレディスの最初の妻は六歳年上で一人娘を連れた未亡人メアリー・ニコルス (Mary Nicolls née Peacock 1822~1861) であった。メレディスは二十一歳の若さ (1849年) で六回の拒否をもともせず情熱で押し切ってメアリーと結婚した。メアリーの父親はトマス・ラブ・ピーコック (Thomas Love Peacock 1785~1866) という文人で詩人シェリーの親友でもあった (漱石の蔵書目録にもピーコックの著書が二部みられる)。ロンドンの文壇になんら知己のなかった無名のメレディスを取り立てた大恩人であった。メレディスの最初の詩集 (Poems 1851) は実父ではなくこの義理の父に捧げられている。しかもピーコックが開明的であったため娘のメアリーは兄の文学仲間と交流し、文芸同人誌に参加しエッセイを寄稿していた。メアリーはメレディスと結婚してからも文筆で身を立てる夢を諦めていなかったようだ。つまり二人の結婚は夫婦どちらも文学者を志していたがためにうまくいかなかったと想像される。加えて家計は常に貧困であった。それはメレディスが頑なに文筆以外の仕事をしようとしなかったことに原因があった。1853年にメレディス夫婦のあいだで唯一の子供アーサーが生まれたが、1857年には結婚は暗

礁に乗り上げ二人は別居状態にあったとみられている (Johnson 1972:211)。

1861年の春頃からメアリーは持病の腎臓病が悪化し病床にあった。しかしメレディスは晩年のメアリーの懇願を拒否し、愛児アーサーをメアリーに会わせることを許さなかった。しかもメアリーが死の床にあった夏、息子アーサーをスイスやイタリアの景勝地に連れ回したのは残酷な仕打ちであった。そしてようやく臨終の一月前にメアリーは重篤であるという親友の説得のおかげでアーサーをメアリーのもとに送ることを許した。メアリーは1861年の10月に39歳で死去した。このメアリーの死因は自殺とする説があるが、ブライト病による腎臓浮腫が死因であったという記録を疑う根拠はない。

メアリーの死から三年後メレディスは夫に尽くすタイプの女性マリー (Marie Meredithnée Vulliamy 1840~1885) と再婚した。メレディスはその妻にもまた先立たれるが、死ぬまで二人目の妻については語っても最初の妻メアリーのことを語ることは一切なかったという。

#### (5) メレディスとモリエールの喜劇

メレディスの代表的フェミニスト小説とされる『エゴイスト』と『ダイアナ』は男と「新しい女」の生々しい葛藤を描くことから一步退いているような印象を受ける。それはメレディスが描くところの男性優位の社会におけるエゴイストとしてのウィロビー (『エゴイスト』) とウォーリック氏 (『ダイアナ』) はどちらも「新しい女」の敵役として迫力不足であることに原因がある。これは同時代に「新しい女」について書かれた小説と比較することで明らかになる。例えばジェームズの『ある婦人の肖像』<sup>(9)</sup>におけるオズモンドやエリオットの『ミドルマーチ』<sup>(10)</sup>のカシューバンは「新しい女」であろうとするそれぞれの妻 (ヒロイン) を執拗に苦しめる。そして「新しい女」たちはほとんど心理的に窒息させられ容易に出口を見出すことはできない。しかしメレディスの小説の男たちは弱い。『エゴイスト』のウィロビーはクララの拒絶に堪えかねて、以前から彼に好意を寄せていた女性 (ラエティシア嬢) について言い寄ってしまうという弱さをみせる。その結果、意中の女性 (クララ) を手放さなければいけない。また『ダイアナ』の夫ウォーリック氏はダイアナを不貞で訴えたものの敗訴すると病気に倒れ、ダイアナと和解を申し込むという弱さをみせる。そしてほどなく病気からは回復するものの交通事故で死去してしまうのである。

このようにメレディスは「新しい女」とそれを抑圧する男性像をつきつめて描くことを避けた。そしてヒロインを最後に不幸にしない条件で「新しい女」を題材にした小説を創造するためには喜劇的な処理が必要であった。そこでメレディスが手本としたのが十七世紀フランスのモリエールの性格喜劇であったとみられる。

メレディスは『エゴイスト』を発表する二年前 (1877.2.1) に生涯で唯一ともいわれる講演をロンドンで行った。その講演は『喜劇の思想と喜劇精神の使用について』 (On the Idea of Comedy and the Uses of Comic Spirits) と題され、同年には同じ表題で雑誌に発表された。書翰集によるとこの講演は1876年10月まで『喜劇の思想：主としてモリエールによって表されたところの』 (The Idea of Comedy :chiefly illustrated by Molière) という

演題を用意していた。このことで明らかのようにメレディスの喜劇論はモリエールの性格喜劇を意識したものであった<sup>(11)</sup>。

モリエールの喜劇とは十七世紀フランスのブルジョワの価値観に基づき、理性と感情の均衡を求める精神の発露である。つまり彼の喜劇は、世の中で行き過ぎと考えられる性格を持った人物を舞台上にのせて、それを笑いの対象とすることによって矯正に導こうというものである。例えば『才女気取り』(1659)ではあまりに才女ぶる女性が、『人間嫌い』(1666)では本音をあまりに正直に表明する人物が、そして『守銭奴』(1668)ではあまりに吝嗇な人物が、『ドン・ジュアン』(1665)では行き過ぎた快樂を追求をする貴族が笑われる対象とされている。

小説『エゴイスト』の序章にメレディスは「喜劇精神」(the Comic Spirit)を論じた喜劇論を置いている。これは小説『エゴイスト』をモリエールの喜劇論の延長として読んでほしいというメレディスのメッセージであろう。この序章(喜劇論)の末尾には主人公ウィロビー・パターンの墓碑銘が次の様に掲げられている。

Through very love of self himself he slew;  
let it be admitted for his epitaph.

(己を愛しすぎたばかりに彼は彼自身を殺してしまった。  
これを彼の墓碑銘としようではないか。)

ウィロビーは小説のなかで自分の過剰なエゴイズムの報いを受けるが死に至るわけではない。つまり墓碑銘にある *he slew himself* は字義通りの「彼は彼自身を殺害した」の意ではなく「(過剰な自己愛による)自業自得でお手上げになってしまった」という戯言である。滅びたとすればそれはエゴイストとしてのウィロビーであり、小説はその結末で彼の更生と新妻ラエティシアとの幸福の可能性を残しているのである。

#### (6) 『虞美人草』におけるモリエール式喜劇の否定

メレディスは「笑い」によって行き過ぎを矯正しようとするモリエール式の喜劇を小説『エゴイスト』で再現しようとした。そしてこのメレディスの喜劇精神は小説『ダイアナ』でも受け継がれている。メレディスは書翰のなかで、衝動的な行動で軽率な過ちを繰り返すダイアナを小説のなかで「陽気に殺してしまうことが出来たがそうしなかった (I could have killed her merrily)」と告白している。そして最後にダイアナをフェミニストのままで受け入れてくれるレッドワースと結婚させる筋運びに苦労したと記している<sup>(12)</sup>。この「ダイアナを陽気に殺したかもしれない」と述べたメレディスの言説は下記に示したような漱石が繰り返す「殺す」という穏当でない言説と奇妙な一致を示す。

○虞美人草は毎日かいてゐる。藤尾といふ女にそんな同情をもつてはいけない。あれは嫌な女だ。詩的であるが大人しくない。徳義心が欠乏した女である。あいつを仕舞に殺すのが一篇の主意である。(小宮豊隆宛書翰.1907.7.19)

○小野さんは危い。情たる巧笑にわが命を托するものは必ず人を殺す。藤尾は丙午である。(虞美人草十二)

○(甲野)「藤尾が一人出ると昨夕の様な女(井上小夜子)を五人殺します」  
(虞美人草十三)

○(宗近)「…糸公は尊い女だ、誠のある女だ、正直だよ、君の為なら何でもするよ。殺すのは勿体ない」(虞美人草十七)

しかし上掲の『ダイアナ』に関するメレディスの書翰は息子の W.M.メレディスが編纂した書翰集(Meredith 1912)に掲載されるまで公表されたことはない。したがって漱石が上に挙げた小宮宛書翰や『虞美人草』のなかで使った「殺す」という言葉はメレディスが小説『エゴイスト』の序の末尾に置いたエゴイスト(ウィロビー)に捧げた墓碑銘「彼は彼自身を殺した」(he slew himself)を意識した可能性が高いと思われる。そして漱石は『虞美人草』のなかでメレディスの戯言としての「殺す」をあえて字義通りに解釈してみせたのではないか。もちろん主人公が最後に死去することだけによって喜劇が悲劇に転じるのではない。『虞美人草』が喜劇ではないのは、漱石の藤尾とその母親に対する描写に全くユーモアが見られず、敵意すら感じられるためである。モリエールの『ドン・ジュアン』は最後に主人公が事故死するものの喜劇の傑作としてみなされている。それはこの戯曲を通じてドン・キホーテにおけるサンチョ・パンザのような従者スガレナルとドン・ジュアンとの風刺たっぶりの掛け合いがこの芝居を喜劇にしているのである。

『虞美人草』では宗近がすべての登場人物の面前で、藤尾から手渡された金時計をたたきこわし彼女の人格を完全に否定する。このことで藤尾は衝撃を受け突然死する。漱石にとって徳義に反した「新しい女」は駆逐される対象であったように思える。この藤尾の死を自殺と解釈する読者も多いようだが、小説の中では藤尾が服毒したなどの描写は一切ない。これは漱石がメレディスと並んで愛読していたヘンリー・ジェイムズの影響ではないだろうか。ジェイムズの作品には、繊細な感覚を持った人物(特に子供や女性)が肉体的な暴力の結果ではなく精神的なショックで突然死する例がよく出てくる。管見に入った限りでも『デイジー・ミラー』(Daisy Miller 1878)、『その生徒』(The Pupil 1891)、『ねじの回転』(The Turn of the Screw 1898)にそのような精神的なショックが原因となった突然死の事例がみられる。そしていずれの場合も突然死したという以外の説明をジェイムズは与えていない。

それでは『虞美人草』(十八)におけるメレディス引用の典拠とされている『エゴイスト』と『ダイアナ』の当該部分を検討してみよう。

(7)『エゴイスト』における出奔(The Egoist 27・28章)

### 【それまでの話】

クララ・ミドルトンは美貌と聡明さを備えた十八歳である。彼女は大地主であるサー・ウィロビー・パターンの求婚に対して最初は乗り気ではなかったが、周囲の強い勧めで教会での正式な婚約を受け入れてしまう。そしてパターン邸に父親ミドルトン博士と共に招かれて滞在している。パターン邸にはウィロビーの従兄弟のヴァーノン、少年クロスジェイやウィロビーを崇拝する多くの親戚の中年女性や、敷地内に病弱の父親と住むラエティシア嬢がおり、ウィロビーはその領主のように振舞っている。パターン邸に滞在しているうちにクララはウィロビーが必要としているのはパターン家の存続のためにふさわしい従順で思い通りに操れる女性であることを悟る。クララは二人の婚約を解消することを懇願するがウィロビーは聞き入れない。

実は過去においてウィロビーの婚約者コンスタンシア・ダラム嬢がパターン邸から友人であったオックスフォード大尉と逐電してしまい、ウィロビーは大いに面目を失った苦い経験があった。それでどうしても今回はクララを自分の妻にしたいと考えていた。クララの父親であるミドルトン博士も娘が本気で破談を望んでいるとは信じようとしないので、居心地の良いパターン邸を去ろうとしない。困り切ったクララは一人だけで出奔を決意し、少年クロスジェイにだけそのことを告げ、豪雨のなか最寄りの鉄道の駅に一人徒歩で向かう。ロンドンに居る女友達を訪ねるのが口実であるが、クララの乗った列車が駅を去った後、パターン邸に居るウィロビーには別れの手紙が届けられる手筈になっている。

### 【27章】 At the Railway station 「鉄道の駅において」

最寄りの駅に徒歩で到着し、濡れた衣服のまま駅の待合室で列車を待っているとクララの出奔をクロスジェイから聞き出したヴァーノンが現れる。ヴァーノンはウィロビーの従兄弟で文学で身を立てようと考えている。また若いときに下宿屋の娘との結婚に失敗している。しかしその妻は既に病死していた。ヴァーノンはクララを見つけるとまず彼女が一人だけであるかと問う。最初クララは真意を図りかねて、メイドは連れていないと応える。そしてヴァーノンは列車が来るまで十分な時間があるので、駅に隣接した旅籠で濡れた靴下を乾かすことを提案し、クララはこれに従う。説得の機会を得たヴァーノンはこのような形で去るのは、父親だけでなくクララ自身のためにもよくないと論ずるが、クララは聞き入れない。結局ヴァーノンは「あなたには自分の自由意志で行動して欲しい」(I wish you to have your free will.) と言い、クララを無理に引き留めようとはしない。そしてクララを残し一人馬車に乗ってパターン邸への帰途につく。

### 【28章】 The return 「帰還」

ヴァーノンが去り、列車を待つために駅舎に戻ろうとしたクララの前に今度はド・クレイがパターン邸から馬車で到着する。ド・クレイは明らかにクララが駅に居ることを予期しており、彼女がロンドンの女友達を訪ねるのに自分が同伴することを提案する(これは世間からは駆け落ちとみなされてしまう)。クララはヴァーノンが先ほどなぜ、「一人きりなのか？」と尋ねたことの真の意味を悟る。ヴァーノンはクララがド・クレ

イと示し合わせて逐電しようとしていると疑っていたのだ。そのときパターン邸に滞在しているジェンキンソン夫人が屋敷の晩餐へのゲストを出迎えに駅に到着したことでクララは彼女もド・クレイの姿を目撃したのではないかと怖れる。クララはまだはっきりと自覚していないものの既に心はヴァーノンに惹かれていたようだ。そのためこのような形で、ましてド・クレイとともにパターン邸を去ることはできないと判断する。そしてクララはド・クレイが執拗にロンドン行きを主張するのを拒否し、一頭立ての馬車でパターン邸に帰還する。

(8) 『ダイアナ』における出奔 (Diana of the Crossways 25・26 章)

【それまでの話】

ダイアナ・メリオンは美貌と文学的才能を備えたアイルランド系の女性であるが、恒産のある境遇ではなかった。彼女は最初に求婚をしたウォーリック氏と軽率にも結婚してしまう。しかし夫ウォーリック氏はダイアナの奔放な行動を受け入れることができない。そして彼はダイアナとダイアナが親炙していたデニスバラ卿との関係を不貞行為として裁判所に訴えた。ダイアナはすべてに嫌気がさし、裁判の結審を待たずに海外に脱出しようとする。しかしこれが誤った判断であることを確信したダイアナの親友のエマ・ダNSTONは使者としてレッドワースをケント州にある十字路邸 (the Crossways) に送り、出立しようとしていたダイアナを引き留めた (第9章)。やがてダイアナは小説家として自立することを決意しロンドンに居を構える。その後ダイアナへの不貞の嫌疑は陪審員によって晴らされる。その頃デニスバラ卿は病死する。また夫のウォーリック氏も心臓病で余命があまりないことが明らかになる。そのころダイアナはデニスバラ卿の甥である若き国会議員デイシアに出会い、強く惹かれる。ダイアナは一人フランスに休暇に出掛けるが、デイシアは彼女をフランスにまで追いかけて愛を告白する。ダイアナは態度を保留するがウォーリック氏のもとに戻らないことは約束する。

【25 章】 Once more the crossways and a change of turnings

「再び岐路に立ち方向が変わること」

デイシアは二人の関係がこれ以上停滞するのが我慢できないとしてダイアナのロンドン住居を訪問する。ダイアナはデイシアが別の女性と結婚することを告白されるのを怖れていた。しかし予想に反しデイシアはダイアナに求婚する。そして二人だけのアルプス旅行を提案する。ダイアナはこれらを受け入れる。しかしこの旅行は二人が世間から隔絶して生活することを社会的に宣言することと同じである。またデイシアにとっては政治家としての未来を棒に振ることを意味するので、初めから無謀な計画であった。翌日、二人の待ち合わせは夕刻八時にパリに向かう列車の発車する駅 (ヴィクトリア駅) である。ダイアナは召使いにパリに発つことを告げ準備を整えた。しかしそのときレッドワースが突然戸口に現れ、ダイアナに今すぐ一緒に来なければいけないことを告げる。

【26 章】 In which a disappointed lover receives a multitude of lessons

「失望した恋人が多く、教訓を得ること」

デイシアは約束通り、駅でダイアナを待つが彼女は現れない。ダイアナが来ることを諦めたデイシアは歩いてジェントルマンズ・クラブに向かう。そしてその後、再び徒歩でダイアナの住居を訪ねる。そこで召使いに尋ねるとダイアナはある紳士（レッドワース）と六時ごろから出掛けて戻ってこないという。翌日デイシアはダイアナの消息をエマに尋ねるために郊外のダンストン邸を訪ねる。するとまさにエマは手術中であった。そしてダイアナはその現場で医師を助けていることを知る。デイシアはダイアナが約束を破った理由を理解する。幸いなことにエマの手術は成功したことをダイアナに告げられてデイシアは一人ダンストン邸を去る。

#### (9) 虞美人草 (十八) の引用の正体

『虞美人草』(十八)におけるメレディス引用の前半をみてみよう。

○ある男とある女が謀し合せて、駐車場で落ち合ふ手筈をする。手筈が順に行つて、汽車がひゅと鳴れば二人の名誉はそれぎりになる。二人の運命がいざと云ふ間際まで逼つた時女は遂に停車場へ来なかつた。

確かにこの部分は男女が堅く約束したのにもかかわらず女性は現れず、男性が駐車場で待ち惚けを食うということで『ダイアナ』によく一致する。しかし『エゴイスト』のクララもド・クレイの申し出を受け入れて（クララに駆け落ちの意図はなくとも）一緒にロンドンに出発すれば世間は二人は謀し合せて落ち合つたと考え、彼らの名誉はそれぎりであった。

○男は待ち老の顔を箱馬車の中に入れて、空しく家へ帰つて来た。

この部分はロンドンの中心部を徒歩で移動した『ダイアナ』のデイシアとは一致しない。むしろ傷心のうちに馬車で家に戻つたという状況は『エゴイスト』のド・クレイの境遇に似ている。そして小野に約束を破られた藤尾が人力車で新橋の駅から帰還するのは、馬車に乗ったド・クレイの姿に近い。

○あとで聞くと朋友の誰彼が、女を抑留して、わざと約束の期を誤まらしたのだと云う。

『エゴイスト』のヴァーノンは駅前の旅籠でクララに出立を思いとどませようとはするが、彼女の意志を尊重しているので無理にクララの出発を遅らせる意図はなかつた。しかしヴァーノンが「お一人ですか？」という質問を發したのは重要であつた。このおかげでクララは後にド・クレイと一緒にロンドンに行きたいという申し出をした際、その一見罪のない提案に潜む危険を察知することができた。

『ダイアナ』のレッドワースの場合はダイアナとデイシア二人の逐電の計画を知って阻止したのではなく、生きるか死ぬかの手術をするエマの身を案じてダイアナを必要としていたため、結果的にダイアナとデイシアとの駆け落ちを防いだ偶然である。これに類する場面を『虞美人草』で探せば、第二章で甲野宅で藤尾と小野が二人きりで危ない雰囲気になったとき、藤尾の母親が帰宅しその緊張が崩れる場面がそれに当たるだろう。

このように『虞美人草』(十八)にみられるメレディス引用は『エゴイスト』と『ダイアナ』の両方の要素を含んでいる。しかし丁寧にメレディスを読み込んでいた漱石が不注意で両作品を混同するのは考えにくい。したがって『虞美人草』でメレディスの両作品の同じような箇所を混ぜ合わせた引用を行ったのは意図的に両方の小説の要素を組み込んだ可能性が高いのではないか。つまり『エゴイスト』と『ダイアナ』はどちらも「新しい女」が束縛を逃れ、新しい恋人と自由を獲得するという物語（「柳模様の物語」）であることを漱石は理解していたと思われる。メレディスは『エゴイスト』において「柳模様の物語」を行き過ぎた性格の男性（我の人）を笑いによって矯正に導くというモリエール式喜劇に翻案した。そして『ダイアナ』においては「柳模様の物語」に実在のフェミニスト（キャロライン・ノートン）の事跡を加えることで同時代性を与え一般読者の支持を得た。

しかし『虞美人草』の漱石はメレディスのように「新しい女」の生き方という主題を喜劇的に扱うことに強い抵抗があったようだ。それは藤尾の悲劇的な最期を見れば既に明らかであるが、最終章で甲野が日記に書きつけた（人間の道義の必要性を認識させる上で）「悲劇は喜劇より偉大である」という悲劇の擁護論でも強調されている。

[注]

- (1) ヘンリー・ジェームズ原作の映画化では *The Bostonians*（監督 James Ivory 1984）、*The Portrait of a Lady*（監督 Jane Campion 1996）、*The Wings of the Dove*（監督 Iain Softley 1997）等がある。メレディス作品の映画化はまったく見当たらない。
- (2) 「予の愛読書」1906.漱石全集二五巻 p.153
- (3) 二郎の「メレジス」に関する質問「彼が一生独身であったかどうか」に注目したい。一郎が引用したメレディスの書翰は書翰集第一巻 p.115 に掲載されている。そして同じ巻の p.7 でメレディスの最初の結婚についての息子ウィリアムが付け加えた解説がある。それによると夫婦はお互いに気性が激しく不和が絶えず、結婚は「1858年に破局を迎えた」(In 1858 came catastrophe.) とある。そしてその後メレディスは幼子アーサーとロンドンに居を移したと曖昧に記している。しかしメレディスの最初の妻の愛人であったヘンリー・ウォリスに関する記述は全くない。この息子ウィリアムが記したメレディスに都合の良い記述がメレディスの妻マリーが突然愛人と家出をしたという伝説をつくった源泉のようである。実際はそれ以前から夫婦は別居状況にあった。このメレディスの書翰集にある唯一の伝記的解説を漱石が見逃す筈はない。したがってこの書翰集を読んでいたはずの『行人』の一郎がこのメレディスの結婚生活の破綻を知らなかったのはおかしい。しかしながらここでメレディスの最初の結婚の失敗を明らかにすると『行人』における一郎の結婚生活がどのように崩壊していくかということを強く

暗示してしまう。したがってあえてこのメレディスの最初の結婚の失敗を『行人』では伏せたのであろうと考えられる。

- (4) 『エゴイスト』第 29 章でクララの父親ミドルトン博士はド・クレイ大佐をカトゥルス (Cattulus 前 84 頃～54 頃) の詩集『カルミナ』(Carmina) の 39 番に登場するエグナチウスに  
なぞらえている。ミドルトン博士は最後まで引用していないが、カトゥルスは恋敵のスペイン  
人がいつも軽佻浮薄で「白い歯」をいつも見せていることを「自分の尿で歯と歯茎を毎朝み  
がくスペイン人」とからかっているのである。
- (5) Cline (1970) Letter to André Raffalovich. April 8 1882
- (6) Cline (1970) Letter to Robert Louis Stevenson. March 24 1884
- (7) Cline (1970) Letter to Lady Ulrica Dunscombe. April 19 1902
- (8) メレディスの小説に登場する「新しい女」とみなされる女性には以下のような人物がある  
(年代順)。①ローダ (Rhoda Fleming 1865) ②ルネー (Beauchamp's Career 1875/6) ③クララ  
(The Egoist 1879) ④ダイアナ (Diana of the Crossways 1885) ⑤ネスタ (One of our  
Conquerors 1891) ⑥アミンタ (Lord Ormont and his Aminta 1894) ⑦カリンシア (The Amazing  
Marriage 1895)  
この中で②が唯一ヒロインと結ばれるはずの男性が事故死するという悲劇的結末を持つものの、  
その他全てのヒロインは様々な曲折を経た後に理解ある伴侶と結婚するという結末になってい  
る。このことが当時の女性読者に好評であった理由であろう。
- (9) Henry James: The Portrait of a Lady 1881
- (10) George Eliot: Middlemarch 1869
- (11) Cline (1970) Letter to Edward W.B. Nicholson (September 27 1876) また Letter to F.J. Furnivall  
(August 24 1876) には仮演題として Morièrè and the Idea of Pure Comedy"とある。
- (12) Cline (1970) Letter to Mrs Leslie Stephen. May 19 1884

[参考文献]

- 漱石 (1994) : 漱石全集第四巻『虞美人草』岩波書店 1994  
海老池 (1968) : 海老池俊治『明治文学と英文学』明治書院 1968  
飛ヶ谷 (2012) : 飛ヶ谷美穂子『漱石の源泉—創造への階梯』慶応大学出版会 2012  
久野 (1950) : 久野真吉「漱石・沙翁・メレディス:『虞美人草』に及ぼせる英文学の影響」弘前大  
学人文社会.1.1950  
久野 (1961) : 久野真吉『『ヂ・エゴイスト』のクレアラか『十字路のダイアナ』のダイアナか—  
『虞美人草』におけるメレディスの引用につき—』『宮城学院女子大学研究論文集』1961.12  
Cline (1970) : Cline, C.L. "The Letters of George Meredith 3 vols." Oxford. 1970  
Crow (1971) : Crow, Duncan. "The Victorian Woman" New York. 1971  
Jones (1999) : Jones, Mervyn. "The Amazing Victorian. A life of George Meredith" London. 1999  
Johnson (1972) : Johnson, Diane. "The True History of the First Mrs. Meredith" New York. 1972  
Mayo (1942) : Mayo, Robert D. "The Egoist and the Willow Pattern." English Literary History IX (1942)  
pp.71-78 Meredith (1979) に所収。  
Meredith (1979) : Meredith, George. "The Egoist" A Norton Critical Edition. 1979

Meredith (1980) :Meredith,George"Diana of The Crossways"Virago.London.1980

Meredith (1887) :Meredith,George"An Essay on Comedy and the Uses of the Comic Spirit "The New Quarterly Magazine" April 1877.Meredith (1979) に所収。

Meredith (1912) :Meredith,W.M."Letters of Geroge Meredith, Collected and Edited by His Son 2 vols"London.1912.

Stevenson (1853) :Stevenson,Lionel."The Ordeal of George Meredith"New York.1953

[付記]

本稿は京都大学近代文学研究会（2013年10月29日）で行った口頭発表に基づいています。席上、貴重なご意見を頂戴した諸賢に篤く感謝いたします。

（おがはら としお・本学文学部非常勤講師）